



平安朝日記集

全



平安朝日記集

全

大正二年八月一日印刷
大正二年八月四日發行

有朋堂文庫
平安朝日記集 (非賣品)

編輯者兼
發行者

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者

野村宗十郎

東京市京橋區築地三丁目十一番地

印刷所

株式會社東京築地活版製造所

東京市京橋區築地二丁目十七番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

緒言

平安朝文學中、歴史物隨筆等に雁行して地歩を占むべき一種の文學を日記となす。或は家居の日録あり、或は旅次の見聞録あり。以て當時の世相を窺ふべし。今其著名なるもの六種を併刊し、附するに十六夜日記、中務内侍日記を以てす。後の二書は、鎌倉時代に成れりと雖も、其形式内容共に、殆ど純乎として平安朝の風格を存すれば也。

土佐日記が國文日記の鼻祖として推重せらるゝは、夙に世の知る所。承平四年、千古の歌聖紀貫之の、土佐守の任滿ちて、海路京都に歸れる時の紀行也。蜻蛉日記は「右大將道綱母」として、夙に百人一首に名を知られたる藤原兼家の室の日録。其記事は天曆八年より以後約二十年に涉れり。和泉式部

日記は、平安朝女流歌人の白眉を以て許されたる和泉式部の手録する所、記事は長保五年以後數年間に涉れり。紫式部日記は、即ち源氏物語の著者たる絶世の女文豪が筐底の祕記、蕞爾たる斷簡と雖も、其珍惜すべきや素より論なし。讃岐典侍日記は、源三位頼政の女、人こそ知らねの歌によりて有名なる沖の石の讃岐が、其宮女生活の倂を留めたるもの。嘉承二年以後數年間の事を録せり。更科日記は、濱松中納言物語の著者菅原孝標女の著す所。筆を東國在住の時に起して、上洛途中の記事より京都定住の後に及び、中に康平元年の記事あり、以て略其年代を推すべし。十六夜日記も、亦女歌人として著名なる阿佛尼の作。其子二條爲相が異母兄の爲に枉屈を被れるを訴へんとして、遙に鎌倉に下れる時の紀行にして、筆を建治三年

に起せり中務内侍日記は、後宇多帝の後宮に奉仕せる女官の手記せる所、事は弘安三年以後十數年に涉り、紫式部日記讃岐内侍日記等と共に、中古宮禁の空氣を窺ふの好資料たり。

今本書を覆刻するに方りて原據とせる諸本を左に掲ぐ。

土佐日記 岸本由豆流土佐日記考證

蜻蛉日記 坂徴蜻蛉日記解環

和泉式部日記 木版羣書類従本

紫式部日記 清水宣昭紫式部日記釋

讃岐典侍日記 木版羣書類従本

更科日記 西門蘭溪校本

目錄

土佐日記	一——三三
蜻蛉日記	三——二五四
和泉式部日記	二五——三三二
紫式部日記	三三——三八六
讃岐典侍日記	三八七——四五〇
更科日記	四五——五四
十六夜日記	五五——五五〇
中務内侍日記	五五——六三

平安朝日記集索引	三—六八
----------	------

土佐日記

男もすなる日記といふものを、女もして見むとてするなり。その年の十二月二十日あ
云々―男子が漢文體にて書く日記を女子なる我も和文もて試みんとて
その年―朱雀天皇の承平四年解由―任中の算勘滞りなき由の證文

男もすなる日記といふものを、女もして見むとてするなり。その年の十二月二十日あ
まり一日の日の戌の時にかどです。そのよしいさゝか物に書きつく。

ある人、縣の四年五年はてて、例の事ども皆しをへて、解由など取りて、すむ館より出
でて、舟に乗るべき所へわたる。これかれ、知る知らず、おくりす。年比よく具しつる
人々なむ、わかれ難く思ひて、其日、頻にとかくしつゝのゝしるうちに、夜更けぬ。

二十二日、和泉國までたひらかにと願ひたつ。藤原言實、舟路なれどうまのはなむけす。
上中下ゑひ過ぎて、いとあやしく、潮海の邊にてあざれあへり。

二十三日、山康教といふ人あり。この人、國に必しもゐてつかふものにもあらず。こ
れぞ正しきやうにてうまの餞したる。守がらにやあらむ、國人の心の常として、今はと

あざれ―戯
れ、魚の鱗
るにかく

ものしが―
しは助辭、
ものがの意

かづけ―贈
與

て見えざるを、心あるものは、恥ぢずきなむ來ける。これは、物によりて褒むるにし
もあらず。

二十四日、講師、うまのはなむけしに出でませり。ありとある上下、童まで酔ひしれて、
一文字をだに知らぬものしが、足は十文字にふみてぞ遊ぶ。

二十五日、守の館より呼びに文もて來れり。呼ばれて至りて、日ひとひ夜ひとよ、とか
く遊ぶやうにて明けにけり。

二十六日、なほ守の館にて、饗しのくしりて、をのこあまたに物かづけたり。詩聲あけ
ていひけり。和歌、主人も客人もこと人もいひあへりけり。詩はこれには書かず。和歌
あるじの守のよめりける。

都いでて君に逢はむと來しものをこしかひもなく別れぬるかな
となむありければ、かへる前守のよめる。

しろたへの浪路を遠く行きかひて我に似べきはたれならなくに

さかしき
よき

大津、浦戸
―共に土佐
國

いづく―
本、いづら
守の兄弟―
新任の

他人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。とかくいひて、前守も今のも、もろともにおりて、今の主人も前のも手取りかはして、醉言に、心よけなることとして出でにけり。

二十七日、大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに、京にて生れたりし女子、ここにして俄にうせにしかば、この比の出立いそぎを見れど、何事もえいはず。京へかへるに、女子のなきのみぞ悲しみ戀ふる。ある人々もえ堪へず。この間に、ある人の書きて出せる歌、

都へとおもふもののかなしきはかへらぬ人のあればなりけり

また或時には、

あるものと忘れつつなほなき人をいづくと問ふぞ悲しかりける

といひける間に、鹿兒崎といふ所に、守の兄弟、また他人これかれ、酒など持て追ひきて、磯におり居て、わかれ難きことをいふ。守の館の人々のうちに、この来る人々ぞ、心

くち網―網
には口、奥
などの稱呼
あり、それ
を人の口に
懸く
諸持―大勢
にて持つこ
と、歌口の
重きを喩ふ
かひ歌―權
歌、甲斐歌
舟屋形の塵
も云々―
魯人虞公聲
を發すれば
清哀梁塵を
動かし、秦

あるやうには言はれほのめく。かく別れがたくいひて、かの人々のくち網も諸持にて、この海邊にて荷ひいだせる歌、

をしと思ふ人やとまるとあし鴨のうち群れてこそ我は來にけれといひてありければ、いといたく愛でて、行く人のよめりける。

棹させどそこひ知られぬわたつみの深きころを君に見るかな

といふ間に、機取ものの哀も知らで、おのれし酒をくらひつれば、早く往なむとて、「潮みちぬ。風も吹きぬべし」とさわけば、舟に乗りなむとす。この折に、ある人々、折節につけて、詩ども時に似つかはしきをいふ。又ある人、西國なれどかひ歌などうたふ。かくうたふに、舟屋形の塵も散り、空ゆく雲もたゞよひぬとぞいふなる。こよひ浦戸にとまる。藤原言實、橘季衡、こと人々追ひ來たり。

二十八日、浦戸より漕ぎ出でて大湊をおふ。この間にはやくの守の子、山口千峯、酒よき物ども持てきて舟に入れたり。行くく飲みくふ。

青節を撫して悲歌すれば聲林木に振ひ、響行雲を過むとの故事
ふりはへて
―わざく―
しりくめ繩
―しめなは

なほしも云云―何の返禮もせず只

二十九日、大湊にとまわり。醫師、ふりはへて、屠蘇、白散、酒加へて持てきたり。志あるに似たり。

元日、なほ同じとまりなり。白散を、あるもの、夜の間とて、舟屋形にはさめりければ、風に吹きながさせて、海に入れてえ飲ますなりぬ。芋も海帶も齒固もなし。かうやうの物なき國なり。求めもおかず、たゞ押年魚の口をのみぞ吸ふ。このすふ人々の口を、押年魚、もし思ふやうあらむや。今日は京のみぞ思ひやらる。九重の門のしりくめ繩の鯰の頭、杜谷樹らいかに、とぞいひあへる。

二日、なほ大湊にとまれり。講師、物酒おこせたり。

三日、同じ所なり。もし、風浪のしばしと惜む心やあらむ、心もとなし。

四日、風吹けばえ出立たず。昌連、酒よき物たいまつれり。かうやうの物もて來る人々、なほしもえあらで、いさくけわざせさす物もなし。賑しき様なれど、まくる心地す。

五日、風浪やまねば、猶おなじ所にあり。人々、絶えずとぶらひに來。

にてはあり得ず、聊の事にてもと思ふに物なくして氣がひける也
白馬―七日は白馬の節會とて白馬を看る儀式ある日なり
よき人―身分ある女

六日、昨日のごとし。

七日になりぬ。同じ湊にあり。今日は、白馬を思へどかひなし。たゞ浪の白きぞ見ゆる。かゝる間に、人の家の池と名ある所より、鯉はなくて、鮒よりはじめて、川のも、海のも、ことものも、長櫃に擔ひつゞけておこせたり。若菜籠に入れて、雉など花につけた。若菜ぞ今日を知らせたる。歌あり。そのうた、

浅茅生の野邊にしあればみづもなき池につみつる若菜なりけり

いとをかし。この池といふは、所の名なり。よき人の、男につきて下りて住みけるなり。この長櫃の物は、皆人童までにくれたれば、飽きみちて、舟子どもは腹鼓をうちて、海をさへおどろかして、浪立てつべし。かくてこの間に、事多かり。今破子もたせて來たる人、その名などぞや、今思ひ出でむ。この人、歌よまむ、と思ふ心ありてなりけり。とかくいひ／＼て、「浪の立つなること」と憂ひいひて詠める歌、

行くさきに立つ白浪のこゑよりもおくれて泣かむ我やまさらむ

いたがり—
ほむるやう
にしてそし
ること

まからず—
まからん
す、退出せ
ん

ものか—も
のかな
—老人の詠
歌といふと

とぞ詠める、いと大聲なるべし。持てくる物よりは、歌はいかゞあらむ。この歌を、此
彼あはれがれども、一人も返せず。しつべき人も交れれど、これをのみいたがり、物
をのみくひて、夜更けぬ。この歌ぬし、「又まからず」といひて立ちぬ。ある人の子の童
なる、密にいふ、「まろこの歌の返せむ」といふ。おどろきて、「いとをかしきことかな。よ
みてむやは。詠みつくは早やいへかし」といふに、まからずとて立ちぬる人を、待ち
てよまむとて求めけるを、夜更けぬとにやありけむ、やがて往にけり。「そもくいかゞ
詠みたる」と、いぶかしがりて問ふ。この童、さすがに恥ぢていはず。しひて問へば、い
へる歌、

行く人もとまるも袖のなみだ川みぎはのみこそぬれまさりけれ

となむ詠める。かくはいふものか。うつくしければにやあらむ、いと思はずなり。童言
にては何かはせむ、嫗翁にをしつべし。悪しくもあれ、いかにもあれ、便あらば遣らむ
とて置かれぬめり。

も誠しく思はる
山の端にげ
て古今集
雑上にあ
かなくにま
だきも月の
かくるゝか
山の端にげ
て入れずも
あらなむ
つとめて
早朝
この人々ぞ
……この人
人一定家本
ぞ以下十二
字なし

八日、さはる事ありて、猶おなじ所なり。今宵の月は、海にぞ入る。これを見て、業平君の、山の端にけて入れずもあらなむ、といふ歌なむおほゆる。もし海邊にて詠ましかば、浪立ちさへて入れずもあらなむ、と詠みてましや。今この歌を思ひ出でて、ある人のよめりける。

照る月のながるる見ればあまの川いづるみなとは海にざりける

とや。

九日、つとめて、大湊より那波泊をおはむとて漕ぎ出でけり。これかれ互に國の境のうちとはとて、見送りに來る人あまたが中に、藤原言實、橘季衡、長谷部行政等なむ、御館より出で給ひし日より、此所かしこに追ひ來る。この人々ぞ、志ある人なりける。この人々のふかき志は、この海にも劣らざるべし。これより、今は漕ぎはなれて往く。これを見送らむとてぞ、この人どもは追ひ來ける。かくて漕ぎ行くまに、海のほとりに留まる人も遠くなりぬ。舟の人も見えすなりぬ。岸にもいふ事あるべし。舟にも思ふ

ふみし—
踏、文、しは
助辭

うれ—末

まほる—食
ふ
賒わざ—代

ことあれどかひなし。かゝれど、此の歌を獨言にしてやみぬ。

おもひやる心は海を渡れどもふみしなれば知らずやあるらむ

かくて、宇多の松原をゆき過ぐ。その松の數いくそばく、幾千年へたりと知らず。本ご

とに浪うちよせ、枝ごとに鶴とびかふ。おもしろしと見るに、たへずして、舟人のよめ

る歌、

見渡せば松のうれごとにすむ鶴は千世のどちとぞ思ふべらなる

とや。この歌は所を見るにえ勝らず。かくあるを見つゝ漕ぎ行くまに、山も海もみ

な暮れ、夜ふけて、西東も見えずして、天氣のこと、櫂取の心にまかせつ。男もならば

ぬは、いとも心細し。まして女は、ふなぞこに頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく

思へば、舟子櫂取は、ふなうた歌ひて、何とも思へらず。そのうたふ歌、

春の野にてぞねをば泣く、吾が薄にて、手をきるくつんだる菜を、親やまほるら

む、姑やくふらむ、歸らや。よんべの菜を、虚言をして、賒わざをして、錢ももて